

市史だより Fukuoka

近世専門部会特集

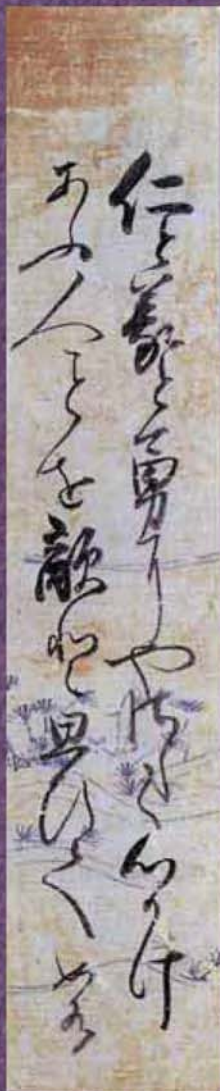
「市史編纂と資料収集」

第4回市史講演会のご案内

7

連
載

福岡市史への歩み
部会だより
コラム 歴史万華鏡
表紙の写真は…



福岡市博物館 市史編さん室

近世専門部会特集 市史編纂と資料収集

今でも時おり新聞やニュースでは、福岡の歴史に關わりの深い、新しい資料発見の報道がなされます。これらの新しい資料やこれまで発見されてきた資料から、様々なところで福岡の歴史は語られてきました。しかし、まだまだ語り尽くされていない未知の部分が多く残されています。

福岡の歴史の全体像を明らかにしていくためには、より体系的、組織的な調査を積み重ねていく必要があります。そのため福岡市史では、6つの専門部会がそれぞれに資料の調査活動を行い、各種データを収集しています。

近世専門部会では、図書館や博物館などの公共機関に所蔵されているものはもちろん、各寺社や個人所蔵となっている、古文書を中心とした資料を、次のような方法で収集しています。

- ①マイクロフィルムカメラ等による撮影
- ②デジタルカメラによる撮影
- ③大型カメラによる撮影（プロカメラマン）
- ④複製（紙焼き作成、フィルム複製など）

1 撮影

資料の撮影については、従来マイクロフィルムと三五ミリの一眼レフカメラでの撮影が主体でしたが、それらに撮影時の条件によって、きちんと撮影できているかどうか、現像してみるまで分からない場合が

あり、時には後日再撮影をしなければならないことがあります。一方、デジタルカメラはパソコンと一緒で使用することで、撮影画像がその場で確認でき、失敗してもすぐに削除、再撮影ができるため、今や主役の座を占めています。ただし、大型の資料や重要な絵図等に関しては精密な撮影が難しいため、専門のカメラマンに撮影を依頼する場合があります。

2 各種データの複製

ところで、歴史のあつい福岡では、市内の大学など様々な研究機関が、長年に渡り、資料調査を行っています。それに加え、他の自治体史編纂の際に、福岡関連の調査・収集が行われていることがよくあります。また公共機関ではすでに所蔵資料をマイクロフィルムで撮影している場合が多く、この場合は、様々な許可をとって、フィルム等を複製したり、写真の焼き付けをさせてもらいます。ただ、大量の資料を焼き付けるため、いわゆる印画紙ではなく、良質の紙にプリントします。これを紙焼きといえます。このように福岡市史の編纂には、資料所蔵者や先行する各機関の方々のご協力が必要不可欠なのです。

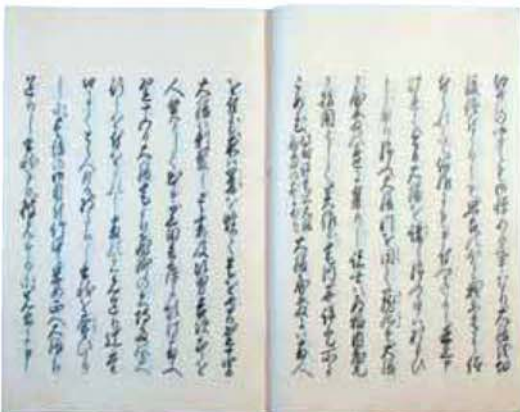
3 資料の筆耕と調査

収集された近世資料の多くは「くずし字」で書

かれています。これはそのまま掲載するわけではなく、現在使われている楷書体に直して（この作業を筆耕と呼んでいます）から掲載することになります。し



▲ 資料の撮影



▲ くずし字の一例（福岡市博物館所蔵「黒田統家譜」）



▲パソコンによる筆耕作業

かし数が膨大であるため、全てが資料編や特別編に掲載されるわけではありません。各巻の性格や分量などを考慮しながら、数多くある資料の中からどれを掲載していくのか、どれを筆耕していくのかを、専門部会の会議で議論・決定していきます。

残念ながら掲載されない資料の方が圧倒的に多いのですが、そうした中にも歴史の情報は詰まっています。二つの資料からわかることは多くありませんが、それらが集まったとき、そこに大きな歴史の形が見えてきます。つまり収集された資料は、たとえ直接にその姿を見せなくても、通史編の叙述の中で福岡の歴史を明らかにする手助けをしてくれるのです。しかも、これらの資料や情報は、福岡市史の編纂事業を通して蓄積されていくことで、次の世代に確実に伝わって行き、後世の編纂事業や研究に役立てられることとなります。

4 近世部会の今後の調査と刊行

さて、研究機関による調査や収集がなされていない資料の場合は、寺社や個人の所蔵者のもとに伺い、許可をいただいてから、調査を行います。また所蔵者などに詳しくお話を伺うと、すでに調査された資料以外の新たな資料が出てくることもあります。近世の資料が伝来している場合、近現代の資料も一緒に残

されていることがあります。時には近世より古い世の資料が見つかる事もあります。そこで福岡市史では各部会が協力して、調査に当たっています。現在、近世専門部会では、資料編近世1、2及び特別編「福岡城(仮)」の刊行に向けて、福岡市内に限らず、武家の資料を中心に資料の収集を行っています。編さん室でも情報の収集は行っておりますが、けっして充分とはいえません。みなさんやお知り合いの方で資料をお持ちであるとか、資料の情報をご存知の方は、ぜひ市史編さん室へ「報」いただければと思います。



▲資料調査風景

近世専門部会の刊行計画

資料編

近世1

平成二十二年

領主と藩政をテーマに、領主部分では小早川家、黒田家関係の資料を、藩政部分ではいくつかの項目に分け、いままで紹介されていない資料を中心に掲載する予定です。

近世2

平成二十五年

福岡藩の家臣団に関する資料を掲載する予定です。

近世3

平成三十一年

近世4

平成二十八

通史編

近世1

平成三十四

近世2

平成三十五

近世・近代

平成三十四

特別編

「福岡城(仮)」

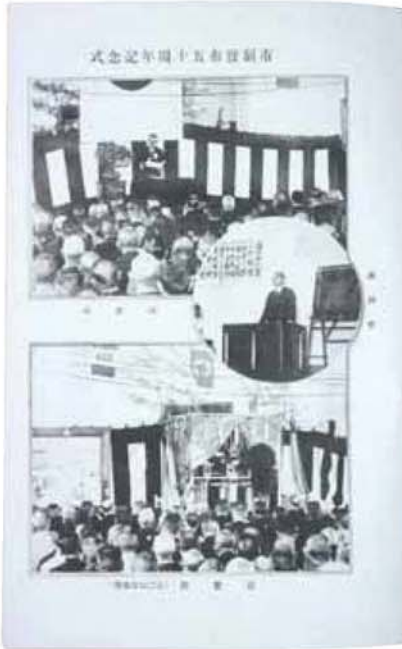
平成二十四

「地図・絵図(仮)」

平成三十三年

福岡市史への歩み 6

◀ 市制発布五十周年記念式の様子(『福岡市市制施行五十年史』)



何回かに分けて昭和十年前後の福岡市史編纂の状況をみてきましたが、編纂室を設置していた割には編纂事業は形を成していないことが判りいたただけたものと思います。市役所の中にあつては、組織的にも、また事業予算的にも要求は満たされてはいないので、編纂事業は進展するきっかけも掴めていなかったものと考えられますし、次第に戦時色が色濃くなりつつある時代とあつては、過去を振り返ることが時勢に合わないことだったのかもしれない。しかしながら郷土史家の活動に目を転じてみると、大正三(一九一四)年四月に、高野江基太郎たかのえもとによって創刊された『筑紫史談』、さらには大正十四年九月に有吉憲彰が創刊した月刊誌『福岡』は共に順調に巻数を数え、多角的な視点からの研究を毎月掲載しています。その寄稿者はいえ、官民あいまつての大集合で、綺羅星のごとき有様でした。その

ような状況下で、永島主任は先回ご紹介したように、福岡市教育会からの依頼で、福岡市史便覧的なものの出版に携わっていたのです。市史編纂担当という立場は善くも悪くも活躍を余儀なくされていたようです。

昭和十三(一九三八)年は市制施行五十周年にあたり、市史編纂事業にとつては恰好の動機づけになると考えられます。普通に考えると大いに飛躍のチャンスと考え、事前に様々な計画を策定したと考えられるのですが、残念ながら、そのような動きを知らしめる資料はまだまだ発掘されていない状況です。

国において自治制発布五十周年記念事業が行われるにあたり、規模はともかくとして地元でも同様な記念事業が計画された模様で、国に遅れることちようど二ヵ月後の五月十七日に、自治功労者の表彰、物故者の慰霊、記念講演会を中心とした式典が行われています。「聖戦中」であるとの認識から華美ではなく「市民総力を以て自治報国の確立をはかる」事が優先された内容であつたようです。ただ式典に先行して四月九日より同二十日まで、市教育会、市通俗博物館の主催で「市制施行五十周年記念大福岡発展史展覧会」が開催され、政治経済、教育観光、風俗娯楽の三部門に分けて展示されましたが、会場となつた岩田屋百貨店では空前の盛況を呈したとされているのが目を引くくらいです。

さらに特筆すべきは、これを機に『福岡市市制施行五十年史』が編纂発行されたことです。三三〇頁余の小冊子ですが、編者永島芳郎の「はしがき」によると大変興味深いことが記されています。

ます。

この冊子は昭和十三年四月に着手し九月に脱稿したとあつて、市史編纂担当が専任しているにしては、短時間に計画されたもので、数年前から出版が計画された様子は窺えませんが、通例ですと、記念事業のひとつとして式典開催時に出版配布するのが一般的と考えられますが、実際には原稿締め切りが九月、市長代理助役の序文が十月に作成され、翌十四年三月に発行されました。せつかく編纂室が置かれ、永島主任以下四名の体制があるのですから、記念出版は事前に計画し、戦中にもかかわらず式典を挙げるならば、それに合わせて出版すべき事柄と思えます。このことから、この出版は突発的な事業計画ではなかつたかと考えられ、正確な出版経緯が是非とも知りたいと思うのは筆者一人ではないと思います。永島主任が文中「杜撰」という単語を三度も記さねばならなかつたのは、心底残念だつたからにほかならないでしょう。

ともあれ、明治二十(一八八九)年からの市勢発展の動きは、主要テーマごとに、統計資料的にまとめられました。通史的な記述が成されたわけではなく、本格的な作業は次回に送られました。



(福岡市博物館顧問 田坂大藏)

▲ 装幀や紙の粗悪さが戦時中の刊行であることを物語っています。

第四回福岡市史講演会

御家騒動と家臣団

—黒田武士の主従意識—

福岡市史編さん室では、市史編さん事業の活動と成果を広く市民の皆様を知っていただくため、毎年講演会を開催しております。今年度は福岡市博物館の秋の特別展とタイアップし、黒田二十四騎や黒田騒動で有名な初期の福岡藩政を題材に、他藩とも比較しながら、江戸時代の黒田家臣団と黒田武士が、いかにして生まれ、そして変わっていったのかを二本の講演とシンポジウムで明らかにします。是非ご参加下さい。

■講 師 福田千鶴氏 (九州産業大学教授)
(兼パネラー) 高野信治氏 (九州大学大学院教授)
柴多一雄氏 (長崎大学教授・司会)
江藤彰彦氏 (久留米大学教授)

■日 時 平成二十年八月三十日 (土)
午後二～五時

■会 場 福岡市立中央市民センター・ホール
入場無料・事前申込不要
(先着四八〇名)



▲ 後藤又兵衛基次
(上の二枚の人物像は福岡市博物館所蔵「黒田二十四騎図」)



▲ 毛利(母里)但馬友信

福岡市博物館平成二十年度特別展紹介

「黒田長政と二十四騎―黒田武士の幕―」

黒田二十四騎とは、黒田節にある名槍「日本号」の呑み取りで有名な母里太兵衛(毛利但馬)や、大坂の陣の活躍で有名な後藤又兵衛など、黒田如水、長政父子に任せ、福岡藩を作り上げた家臣から、特に選ばれて、現在でも言い伝えられている人々です。この二十四騎の成立は江戸時代も半ば天下太平の元禄時代ともいわれ、すでに伝説になっていた部分も多くあったようです。また単なる武功だけでなく、政治、経済、土木など様々な面で藩政に寄与した人物達が選ばれています。その後、現在まで講演や文芸メーシが作られ、黒田家に仕えた武士の原型となってきました。

この展示では、新たな資料の発掘や、これまで伝承してきた遺品の詳しい調査を行い、しかも展覧会として一堂に集めることで、その実像と史実を、改めて明らかにし、郷土の歴史再発見を試みようとするもので、黒田長政生誕四四〇年を記念するにふさわしい、大展覧会といえます。

市史編さん室でも、この展覧会に協力するため、現在の黒田家の家臣団研究の最先端について、第四回市史講演会でお届けするほか、その裏方の作業のため、特に、新たな資料発掘と調査において、展示を担当する学芸課と協力して、古文書、文献の調査、収集作業を進めています。展覧会にはなかなか盛り込めないこれらの資料等でも、今後刊行される市史の資料編や通史編、特別編に活かすことを念頭に置いて、地道な、息の長い調査収集を進めていきたいと思っております。

会 期 平成20年9月12日(金)から11月3日(月・祝)
(月曜休館、祝日の場合は翌日休館)

会 場 福岡市博物館2階特別展示室A・B

▲ 福岡市博物館所蔵の槍「日本号」(撮影 要史康)

部会だより

考古

かつて、考古学的な発見のほとんどは「偶然の出会い」でした。開発ラッシュに沸く昭和四十年代、工事中に何か見つかつて注目を浴びる、そんな「幕がよく見受けられたよう」です。

昭和四十(一九六五)年秋頃、福岡市大字有田(現在の早良区有田)で、宅地造成工事の最中に大量の土器が発見されました。福岡市は翌年、調査を九州大学文学部考古学研究室に依頼し、後に重要遺跡として脚光を浴びる「有田遺跡」の発掘が始まるのです。

この調査では、弥生時代初め頃のV字形区画溝(環濠)や、大量の炭化米(炭化した米)、弥生時代中頃まで続く墓地(甕棺墓群)や権力を表す青銅器などが見つかりました。浮かび上がった連続する集落の存在とその重要性は、福岡市の歴史解明のカギの一つともなっています。

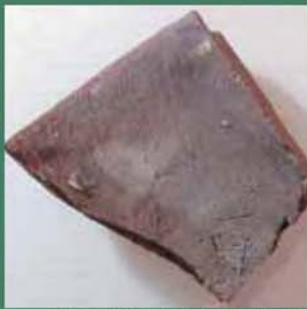
考古専門部会では、当時の調査成果をもとに、新しい視点でアプローチを行っています。「資料編考古3」(平成二十二年度刊行予定)では、当時、紙面の都合などで、充分に発表できなかった遺物の紹介をしています。



▲ この時見つかった炭化米は、現在私たちが食べているものと同じ「ジャポニカ」米でした!(実寸大ではありません)福岡市教育委員会1968「有田遺跡」(写真協力 福岡市埋蔵文化財センター)

古代

「資料編 古代」の編集に必要な資料を収集しています。近年古代を語るうえで欠くことができない資料の一つとして、出土文字資料があげられます。出土文字資料とは文字通り、発掘調査によって地中から出土した遺物に文字が記されているものですが、さまざまな形があります。木に墨で文字などを書いた「木簡」の発見は新聞などでもよく目にしますが、そのほかにも、文字を刻んだり、書いたりした土器(「刻書土器」「墨書土器」)や、瓦に文字を記した「文字瓦」などがあります。古代の文献資料は数が少なく、これらの出土文字資料は、断片的な情報ながら(墨書土器などは二字しか書いていないことが多いのです)大変貴重なものです。ただし研究に利用するにあたっては、文字情報だけに注目することなく、遺物の形態や出土した遺跡の状況もあわせて考えることが重要とされています。古代専門部会では、これら出土文字資料を千冊以上もある福岡市域の発掘調査報告書から抜き出し、遺跡情報と二緒にデータベース化する作業を進めています。数が多い、なかなか先が見えない作業ですが、今後色々な場面で活用できるものと思えます。



▲ 井尻B遺跡出土文字瓦(福岡市埋蔵文化財センター所蔵)「豊評」・「山部評」(アは部の略)と刻まれている。

中世

「資料編 中世1」の平成二十一年度刊行のため、資料調査と編集作業を並行して進めています。これまで七八の文書群について調査を終了しました(六月十三日現在)。今年二月から三月にかけて、福岡市東区の筥崎宮の所蔵資料を調査・撮影しました。同宮蔵の古文書は、「筥崎宮史料」・「筥崎宮史」といった史料集のおかげでほとんどの内容を知ることが可能でした。今回の調査は、筥崎宮のご厚意により所蔵資料のほぼ全点の調査を行い、貴重な資料を間近で見られました。これまであまり紹介されていないものとして、「函崎要記」六冊・「函崎要記拾遺」二冊という記録があります。「函崎要記」は明治期の筥崎宮宮司であった末永茂世が、江戸期までに編纂された様々な記録類などから筥崎宮に関係するものを完全もしくは抄出して引用したもの、および筥崎宮や宮司家・社家に伝来した古文書の写を合わせて明治十二(一八七九)年にまとめたものです。「拾遺」はそれに漏れたものなどを追加し昭和の終戦後にまとめられたと思われる。

このうちの古文書写についてデータ整理をした結果、原本が現在散逸しており前記の刊本史料集でも未紹介のものが四点含まれていました。資料編ではこれらも合わせて筥崎宮所蔵の古文書を収録していく予定です。

民俗

平成二十一年度刊行予定の特別編は、先ごろまで仮題を付されていましたが、ついに正式な題が決定しました。その名も「福の民―暮らしのなかに技がある―」です。

この特別編は、福岡に生きる人々を写真と聞き取り調査で得たことばで描いた群像絵巻です。わけても民俗専門部会として注目しているのは、福岡の人々が、普段の暮らしの中でどういった「技」を編みだし、どのように活用し、そして継承しているのか、という部分です。この「技」というのは、いわゆる職人技のような技能だけでなく、わたしたちが無意識に使っている、人間関係を円滑にする術、仕事や店をうまく続けていくコツ、場面・場所に応じたふるまい方といった、生きていく上での知恵や信条までも含んでいます。これらの技の背景には、親世代からの伝承、個人の経験、または時代に応じた変化と、さまざまな成立と変遷の過程があり、ゆえに技は、その人の生きる場所・時代の気風をあらわしているのではないかと、民俗専門部会では考えているのです。

暮らしに宿る技の編み手である福岡の人々、つまり「福の民」の皆さま方に、今後も聞き取り調査を進めていく予定です。民俗専門部会から調査員が参りましたら、その時はどうぞよろしくお願いいたします。

近世・近現代

今回は福岡城の巡見記です。

特別編「福岡城(仮)」の刊行を担当する近世・近現代両部会はこれまで数回の会議を重ね、資料や内容の検討を行ってきましたが、今回は会議室を離れて福岡城跡を自分たちの脚で歩いてみました。

一行は、専門委員、調査委員、調査補助員など関係者二六名。前日からの雨もとうに止んで、出発時には強い日差しがさんさんと降り注ぐ好天に恵まりました。ルートは、福岡市美術館をスタートして、



▲多聞櫓前 このあと櫓内部を見学

舞鶴中学校から下の橋、潮見櫓へ向かい、そこから松木坂を通り二の丸、本丸、折念櫓、天守台、多聞櫓をぐるぐるとまわって鴻臚館跡を通り、上の橋でゴール。舞鶴公園をS字にまわり、かかった時間はおよそ二時間半。巻の編集に協力をうけている福岡市文化財部職員の方々と、江戸時代の絵図を片手に、公園内の史跡や石垣等の説明をうけながらの巡見でした。

今回の巡見では、普段は見学することのできない各櫓の内部も、福岡市史の調査ということで特別に許可を得て見学させてもらいました。参加者の一人に話を聞いたところ、「(櫓の)中に入るのは初めてです」と感激していました。



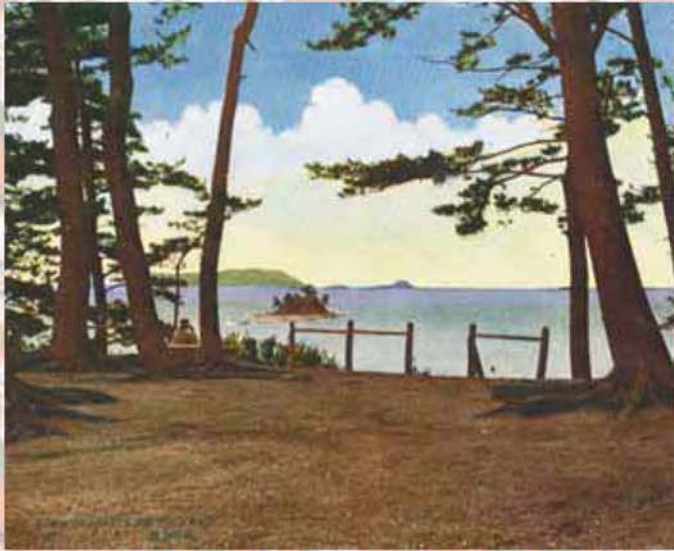
▲上の橋付近 石垣の修復状況について解説をうける

西公園からみる福岡の歴史

西公園は、現在の中央区、小高い荒津山を中心とし、眼下の博多湾や、玄界灘を遠くに望む風光明媚な場所です。対外交流で栄えた福岡地域の歴史を見守った舞台でもあります。

ここは太古には陸続きの離れ島であったといわれ、古代には鴻臚館に滞在する国内外の使節が行き来した港があったとして、万葉集にも詠まれています。中世は荒津庄といわれる荘園の一部だったと言われますが、江戸時代に城下町福岡に取り込まれ、麓に徳川家康をまつる東照宮が建てられたほか、整備された港からは、筑前の産物を積んだ多くの商船や、長崎に警備に出かける福岡藩の軍船が出航して行きました。

近代になり、明治十四（一八八二）年、地元の人々によって公園化が願われ、同二十二年に県の公園として発足し、その後、黒田如水、長政をまつる光雲神社も建てられ、万葉の歌碑、維新関係人物の銅像もおかれるなど、大濠とつながって福岡の歴史観光の名所の一つとなりました。昭和二十（一九四五）年六月十九日の空襲では一部が焼失しましたが、戦後は二五〇〇本の桜、二七〇〇本の躑躅、紅葉を有する、遊歩道付自然公園として、四季おりおりの行楽地に生まれ変わりました。



▲ 昭和初期頃の西公園から望む博多湾（福岡市博物館所蔵絵葉書より）

表紙の写真は…

近世部会特集号にちなみ、福岡市博物館所蔵の四代藩主黒田綱政の甲冑と、黒田如水の和歌短冊を組み合わせました。

綱政（二五九〇〜二七二二）は、幕府御用絵師の狩野派宗家に弟子入りするなど、こよなく文化を愛した藩主です。表紙の甲冑の兜に「注目下さい。近世中期以降に流行した懐古調の「筋兜」で、後立と呼ばれる飾りには、黒田家の家紋である藤巴紋が大きくあしらわれ、ひととき目を惹きます。（甲冑撮影 藤本健一）

一方の短冊は、如水（一五四六〜一六〇四）が子孫のために教訓として詠み、短冊にしたためた二枚の内一枚です。

仁と義と勇にやさしく心がけ
あふんごとに敵と思ひて

短冊二枚を与えられた如水の子息、初代藩主の長政は、この二首を座右の銘として朝夕拜読した、という逸話があります。

不忠不義私もなく今日暮れて
ながらへば又明日もかくこそ

戦国の世を駆け抜けた武将、如水の息吹が伝わってきます。

【参考文献】金子堅太郎「黒田如水傳」

編集後記

市史だより第七号をお届けいたします。

六月に入ってから、今年梅雨らしい天気が続いております。この時期は湿度が高いため、資料所蔵先に調査をお願いすることもためらわれ、市史編さん室では室内作業が多くなっています。

さて、今回の特集は如何だったでしょうか。普段なかなか目にするのではない、私たちが行っている資料調査や室内作業の実情を少しはお伝えできたでしょうか。ご意見ご感想をお寄せ下さい。

市史だより FUKUOKA

第七号 平成二十年六月三十日発行

編集・発行 福岡市博物館 市史編さん室

住所 〒八四〇〇〇一 福岡市早良区百道浜三二一

電話 〇九二（八四五）五二四五

ファックス 〇九二（八四五）五〇一九